古来の製鉄文化を学ぶ

町内の小学生がたたら操業体験

二月二十六日、二十七日の二日間、町内小学校九校の六年生、約百三十人が鳥上小学校の「古代たたら体験工房」でたたら操業を体験しました。

このたたら操業体験は、奥出雲地方で盛んに行われていた製鉄の技術に触れ、郷土を愛する心を育んでほしいと四年前からふるさと学習の一環として行われ、昨年度からは、仁多地域の小学生も加わり、互いに交流を深めています。

今回は事前に、国選定保存技術保持者の木原明村下から、たたらの歴史や作業内容について講義を受け、より理解を深めました。

二十六日は、炭を切ったり、炉を作ったり操業の下準備を行い、二十七日には、学校前の斐伊川にある水路で、砂鉄を摂取する鉄穴流しを体験しました。

たたら操業では、木原村下や村下養成員の直接指導のもと、炉に炭と砂鉄を交互に入れる係、炉の温度を記録する係など役割を分担して作業に取り組み、夕方には、木炭百二十キロ、砂鉄八十キロから約二十四キロの「鋼」が取り出されました。

▲たたら操業に取り組む小学生

児童からは「日本で唯一奥出雲町で行われている『たたら操業』を体験し感動した」、また「互いに協力することの大切さを改めて感じた」など感想がありました。

認知症を正しく理解しよう

地域と介護家族を元気づける集い

「地域と介護家族を元気づける集い」が二月二十日、八川コミュニティセンターで開かれ、介護家族や民生委員など約百人が集まり、介護体験談や専門医の講演を聴きました。

この集いは、全国規模で組織される「認知症の人と家族の会島根県支部」と町、社会福祉協議会が共催して開催しました。

認知症の人にやさしさを提供できるのは、介護をする人や周囲の人の穏やかな対応だと言われています。

しかし、多くの介護者が様々な課題を抱え、孤独感を感じている現状の中で、互いに認知症について正しい理解を深めることが必要です。

▲講演の様子

はじめに家族会代表の堀江徳四郎氏が「認知症は病気であることを理解し、地域全体で支え合うことが大切」と挨拶がありました。

また、認知症の専門医である出雲市の深田医院院長から「認知症は、早期発見、早期治療が大切です。これからどう生きていくかという考えのもと、家族の生活設計を立て、認知症を理解することで、介護の負担が軽減される」と講演がありました。

なお、奥出雲町地域包括支援センターと奥出雲町社会福祉協議会では、高齢者の介護や生活についての相談に応じています。

乗車マナーを

もう一度みんなで考えよう

二月八日、九日の両日、JR西日本と青少年育成奥出雲町民会議委員（延べ三十人）が、JR出雲横田駅前で朝の登校時間帯にあいさつ運動と列車での乗車マナーアップを呼びかけました。

現在、横田高校では、一日約百三十人が列車を利用しています。参加者は、「携帯電話はマナーモードに」、「ヘッドフォンの音量は控えめに」、「床に座らないでください」など乗車マナーの書かれたチラシを配布したり、「おはようございます」と声をかけたりしました。

高校生は、にこやかにあいさつを返して、配られたチラシを見ながら乗車マナーについて再認識していました。

▲マナーアップ活動の様子